

# 岩崎勝平 《橋（大阪）》

運命のいたずら！ 神さま絵かき

父が川越商工会議所副会頭、叔父が電力王福沢桃介という恵まれた環境で育ち、東京美術学校卒業後、新文展特選等順調に制作活動を行っていたが、両人の没後援助が途絶え、結婚の失敗、仲間とのしがらみ等により画壇を離れた。

戦後、岩崎のことを神さま絵かきと尊称した川端康成や河北倫明等の協力で復帰を目指すのが、完璧主義、プライドの高さ等が邪魔をして不遇な生涯を送った。

《橋（大阪）》は小品ながら充実していた時代の作品である。兄がこの地に勤務していた関係で、しばしば訪れ作品を残している。

私の祖父が画家の父親と懇意にしていた関係で入手したと思われる。骨董好きだったと聞く祖父が亡くなって五年後に生を受けた私にとって、大切に受け継いでいかなければならない作品である。

新井 博（埼玉県川越市）

岩崎勝平 《橋（大阪）》

油彩・板 24.3×33.4cm 1932年

Iwasaki Katsuhira A Bridge (Osaka)



岩崎勝平（いわさき・かつひら／1905－1964年）

埼玉県川越生まれ。1930年東京美術学校西洋画科卒。36年文展鑑査展で選奨。37年新文展で特選。39年春台展で岡田賞を受賞。47年から京橋の繭山龍泉堂に出入りし、川端康成、河北倫明らと親交する。64年没、59歳。

# 脇田 和《ペーパーパレットと筆》

## 脇田さんとの思い出

二〇〇五年一月二七日に九七歳で逝去された脇田さん、最期のベッドでも小箱に絵付けしていた。

霊南坂教会での偲ぶ会が終り、立春の頃世田谷の脇田邸に奥様を訪ねた。食事をしながら思い出ばなしに花が咲いたあと、主のいなくなつたアトリエに通された。足元にあったのがこのペーパーパレット。思わず「ただけますか？」と声のでてしまった。その上に「鉛筆も！」と囁いたことこの上なし。奥様は快諾してくださつた。

嬉しさの余り大事に抱え帰路についたが「絵は日記です。忘れないために毎日筆を執ります」とおっしゃっていた脇田さんの顔が目に浮かび、これを額に納め作品にしようと思いついた。

額装が終り脇田邸へ。「素晴らしいわ、こんなにしてくださつて」と、とても喜んでくださった奥様の笑顔が忘れられない。

木の葉や布の切れはしなどカラージュしてしまうのが得意だった脇田さんにもきつと喜んでいただけれると思う。

新井 博（埼玉県川越市）

脇田 和《ペーパーパレットと筆》

油彩、他・紙 31.4 × 45.2cm 2003年頃

Wakita Kazu Paper Palette and Brushes



脇田 和（わきた・かず／1908 - 2005年）

東京生れ。1923年渡欧。25 - 30年ベルリン国立美術学校卒。光風会会員。36年新制作派協会を結成、会員となる。55年日本国際美術展最優秀賞。70年東京藝術大学教授を退官。98年文化功労者。東京で没、97歳。

# 清宮質文 《水辺の窓》

## 一〇年間待ちつづけた恋人

私は清宮さんのガラス絵が大好きだ。  
二〇〇四年高崎市美術館で開催された「清宮質文のまなざし展」でこの《水辺の窓》に魅了され、アプローチを送り続けて一〇年、遂に晩年のガラス絵の代表作に辿り着くことができた。  
画家にしか描くことのできない空気感、独自の水彩絵の具の滲み、濃淡のブルーの中にぽつと浮きあがる窓の灯りが水面に映り、室内の団欒を感じることができる。  
戦死した学友の鎮魂のために絵を描き続けた画家にしては珍しく暖か味を感じさせてくれる作品である。

新井 博（埼玉県川越市）

## 清宮質文 《水辺の窓》

水彩（ガラス絵）・ガラス 15.6×11.2cm 1989年

Seimiya Naobumi A Window on the Waterside



## 清宮質文（せいみや・なおぶみ／1917 - 1991年）

東京生れ。父は画家の清宮彬。同舟舎に学ぶ。東京美術学校油画科卒。慶應義塾工業学校の美術教師を務める。1957年春陽会会員。サエグサ画廊、南天子画廊、フォルム画廊等で個展。木版画、ガラス絵等を制作。東京で没。73歳。

# 野田哲也 《日記1972年10月25日》

## 野田作品の色彩に新鮮さを感じてー

野田哲也の作品は、白黒のものが多く、ときに色がつけられていても、淡く、渋い。《日記》の初期の作品には、原色の色彩を用いたものが少ないがらみられる。

本作は、暗い改築前の聖路加国際病院の廊下を正面において、前方に左右二つの鮮やかな青色のかたまりー寝具を配して、そのうねるようなかたちは画面全体に力動感をもたらしている。

《日記》の日付から見ると、それは二世誕生のときのものようである。

ところで、野田先生については、楽しい思い出がある。それは二〇〇九年の一月、「わの会」の有志十名ばかりが、同市在住で先生とご懇意の堀良慶氏（会の事務局長）のお世話で、先生のアトリエ訪問と懇談の機会を得たときのものだ。

広いアトリエでは、作品制作のメカの説明を伺ったり、ドリット夫人のお手伝いで木版の摺るところを身近かに拝見した。またそのあとは、丸いテーブルを囲んでビールをいただきながらの歓談のひとときを持った。それは、先生御夫妻の誠実で温かいお人柄に触れる機会でもあった。

伊東總吉（東京都多摩市）

野田哲也 《日記1972年10月25日》

リトグラフ、木版、シルクスクリーン・和紙 43.5×60.0cm 1972年

Noda Tetsuya *Diary: October 25, 1972*



野田哲也（のだ・てつや／1940ー）

熊本県不知火生まれ。東京藝術大学院絵画研究科油絵専攻修了。1968年東京国際版画ビエンナーレ国際大賞を受賞。91年東京藝術大学教授。2014年大英博物館で半年間個展を開催。現在、東京藝術大学名誉教授。

# 堀井英男 《magic room 83-1》

さわやかな銅版画の質感と自由な画想に魅せられて

作者は当時五〇歳、銅版づくりの技術を掌中にして、黒地の空間に横向きの人形を自由に浮かせてその名のとおり「マジックルーム」。このシリーズの力作を二、三年にわたり次々と発表している。

当時私は有楽町勤務の公務員で、昼のつとめから解放されてからは、ときどき画廊巡りを楽しみにしていた。版画収集は、手の届く範囲で創作版画を中心に年数点の割合で手に入れるようにしていた。

銀座では、シロタ画廊、渡邊木版美術画舗、養清堂画廊などを巡って、コースのしめくくりは、八重洲ブックセンター四階の版画コーナー・プリントアートセンターに立ち寄ることが多かった。

当時、その代表の魚津章夫氏は、堀井の芸術性を高く評価し、コレクションとすることを熱心にすすめてくれた。

丁度、一九八四年に堀井の個展が養清堂画廊であり、そのうちの四点を求めたが、本作はそのうちの一点である。

このたび、引越したマンションの白い壁に細い金縁のフレームに収まって、おかげで、私は上質の贅沢を味わっている。

伊東總吉（東京都多摩市）

## 堀井英男 《magic room 83-1》

エッチング、アクアチント・紙 58.0 × 42.5cm 1983年

Horii Hideo *magic room 83-1*



堀井英男（ほりい・ひでお／1934 - 1994年）

茨城県潮来生れ。東京藝術大学美術専攻科（現・大学院）中退。独学で銅版画を習得する。1967年日本版画協会賞を受賞、68年会員となる。76年創形美術学校版画科主任。91年創形美術学校校長。東京で没、60歳。

# 加賀美勳 《卓上の静物》

## 自然から知的静物画へ

一九六〇年代、加賀美勳の一見単純に見える地平線と林だけの風景画に魅せられたのが始まりでした。重厚なマチエール、暗緑色のシユールな不思議な味わいが思い出されます（私の愛する一点展出品）。

この「卓上の静物」という作品はその一〇年後に出合ったものです。

卓上静物は、鋭角的三角形のフォルムと小さな円、縦列状に粒子状の花。卓上は赤一色の単純明快。この○△□で単純に画面を構成していますが、この基本的な造形上の○△□は北斎セザンヌ、仙厓等の画論にも通じ、歯切れのよさに快感すら覚えます。また、十数年前、愛知県小牧市のメナード美術館に收藏されていた加賀美の作品に感動した記憶が蘇ってきました。

加賀美の作品の中に「静物的風景」という不思議な作品の絵が何点かあります。山梨の大自然で出合った形を、自分の中で昇華し知的静物画として大作を連続発表されていましたが、享年五九歳とあまりにも若い死のこの画才が惜しまれてなりません。

金井徳重（長野県中野市）

### 加賀美勳 《卓上の静物》

油彩・キャンバス 45.5 × 53.0cm 1982年

Kagami Isao Still Life on a Table



加賀美勳（かがみ・いさお／1939 - 1999年）

山梨県甲府生れ。1965年東京藝術大学大学院卒。大橋賞、国画賞40周年記念賞を受賞。68年国画賞を受賞し、会員となる。92年愛知県立芸術大学教授。個展で発表。99年長野で没、59歳。

# 宮崎 進 《花と女》

## 重い歴史の影と生きるよろこび

半世紀前の一九六七年、《見世物芸人》で第一〇回安井賞を獲得する。受賞のコメントの中で、「私の青春期をつつんだ、永い抑留生活の中で見つめた、人間や、私達の風土への憧れを、私の作品を通して、自分なりに表現してきましたが、これを機会に、新たな意欲を燃やし、旺盛な制作活動をしていきたいと思えます」と述べている。

宮崎進は、従軍・シベリア抑留という過酷な体験から、一九五〇年代に東北や北海道など「さいてはて」の地を放浪している。風土が似ているというだけでなく、その地の過酷な現実の中に生きる人々に共感。一九五〇年代の作品は風景と人物に二分され、厚塗りで暗い灰色の《さいはて》《溼東》《石狩》《漂泊》などが上げられる。シベリア体験をした宮崎はこの延長に旅芸人を見出すことになる。風土すらない旅芸人に漂泊の自己を重ねたのだろうか。

ここに揚げた一九六〇年代の《花と女》は「旅芸人シリーズ」の中の一作であるが、この作品を再三見ていると国吉康雄のサーカスの踊り子やバレリーナの作品とも共有する人間の哀歎・憂愁と孤独感が漂う。人物のセピア色の隈取りの奥にあるセルリアンブルーのハーモニーがなんともしえない。

やがてこの「旅芸人シリーズ」から宮崎進の制作を根底から揺るがす抽象性の強い《冬の光》《凍る土》《瀬戸の光》へと続き、《TORSO（沈黙）》《黒の風景》などは物質性の強い布地、石膏、セメントなどのコラージュ作品へと移行していく。

日本的な情緒に溺れることなく、生々から湧き出す心理表現の深さを見せつけられる。

金井徳重（長野県中野市）

宮崎 進 《花と女》

油彩・キャンバス 53.0 × 45.5cm 1965年頃

Miyazaki Shin Flower and Woman



宮崎 進 (みやざき・しん / 1922 - )

山口県生まれ。1942年日本美術学校卒。45 - 49年シベリア抑留を経験。60年光風会賞。63年光風会会員。65年日展特選。67年安井賞。81 - 92年多摩美術大学教授。98年芸術選奨文部大臣賞。多摩美術大学美術館館長。

# 三尾公三 《蒼天へ》

## 否定から新たな造形へ

十数年前のことだが、京都の麻田浩先生宅を訪れた折、奥様の美禰さん、「三尾公三先生がお亡くなりになり、お祈りにいって来たところですよ」と言われ、「三尾先生と麻田は仲が良く、おつきあいをしていました」とのことだった。

三尾公三という作家は週刊誌『FOCUS』の原画作家であるくらい知識でしかなかった。しかし、これを機に三尾公三という作家に急に興味をもつようになった。

いろいろ美術の本を漁ると、一九七〇年代後半から現代美術の賞を立て続きに取り、賞を総なめしている画家と知った。

「さげまな否定から新たな出発へ」

三尾公三は四二歳の時に、それまでの画家としての経歴と作品を全て捨て、さらに画材道具などの一式も捨てて、再出発したのである。

京都美大での日本画を捨て、日展の権威主義を嫌い、封建的な美術団体を否定、会員にまでなった光風会とも訣別。その後は自ら試みた厚塗りの壁派的抽象作品さえも捨て去った。そして厚塗り絵具の否定はついに絵具の筆跡（タッチ）の否定、手法の痕跡の否定まで行き着く。

この三尾公三という作家を調べ始めると、私のコレクションした作品《蒼天へ》もご理解願えるのではないかと思う。

金井徳重（長野県中野市）

### 三尾公三 《蒼天へ》

アクリル、エアープラシ・パネル 117.0 × 117.0cm 1999年

Mio Kozo To an Azure Sky



三尾公三（みお・こうぞう／1923 - 2000年）

名古屋市生れ。1942年京都市立絵画専門学校日本画予科卒。53年光風賞を受賞。59年光風会会員。69年サンパウロ・ビエンナーレ日本代表出品。96年芸術選奨文部大臣賞。京都で没、76歳。



# 麻田 浩《窓・鏡》

## 幻想的心象世界・シニールレアリズムへ

再び麻田浩の作品を揚げました。前回の『わの会の眼』とは異なった視点から作品をご紹介します。

この私のコレクション《窓・鏡》(F100号)は、一年のパリ生活に終止符をうち、京都のアトリエに戻った後に制作された作品です。

これより二年前(一九九一年)に同じ作品名(F100号)の《Window-Mirror A》《Window-Mirror B》を制作しており、この二点の作品が英国生まれのシンガーソングライターとして有名なエルトン・ジョンのコレクションであることを知りました。アメリカの建築雑誌『Architectural Digest』にアトランタの自宅写真が紹介され、豪華な部屋の壁に掛けてある写真を見て大変嬉しく思い、不思議な感慨をもちました。

この三部作ともいべき《窓・鏡》の画面に共通しているのは、大きな矩形の窓があり、小さな楕円の中に今日的な暗示の要素をたたえた人の顔、麻田のモチーフである羽根、卵、昆虫があること。また、麻田が好んだという野鳥や蝶、生命の根源である水、生命の誕生とする水滴が描かれ、多重映像のような不思議な空間、この幻視の空間に誰もが酔ってしまいます。

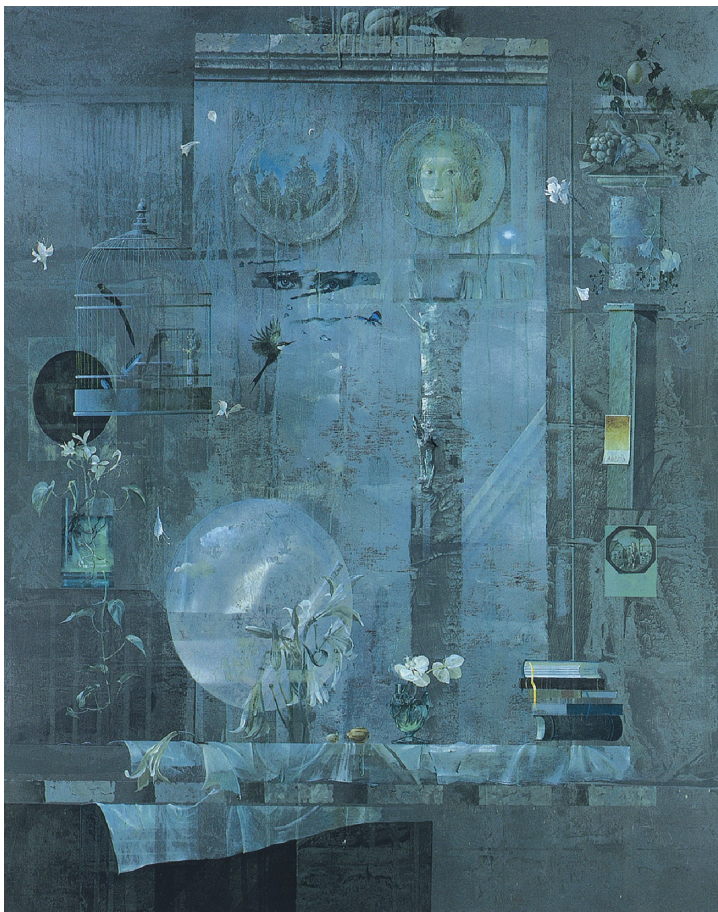
この二年後の一九九五年《窓・四方》で第一三回宮本三郎記念賞を受賞。  
麻田は「大作はそれなりの主題、モチーフがあり、大きさの必然性がなければなりません」と記しています。

金井徳重(長野県中野市)

麻田 浩《窓・鏡》

油彩・キャンバス 162.1 × 130.3cm 1993年

Asada Hiroshi Window-Mirror



麻田 浩(あさだ・ひろし/1931 - 1997年)

京都市生れ。1955年同志社大学卒。68年新制作協会会員。京展須田賞。71年渡仏。ブリ・ナショナル賞受賞。カンヌ国際版画芸術ビエンナーレ第1位受賞等多数。細密な洋画を制作し、銅版画家としても活躍。京都府文化功労賞。自死、65歳。

# 星 襄一 《ブランコ星座26番》

## 星座・地平・樹シリーズへと続く

星襄一の代表作といえど誰もが《王の樹》(一九七六年)と応えらると思ふ。この作品は最晩年に近い作品であり、今日も「樹」シリーズは人気が高くファンが多い。

私にとって星襄一作品の一番の魅力は初期の「星座シリーズ」にある。「星座シリーズ」は、No.1からNo.54までであるが、星襄一自身は「星は永遠の世界、人間への郷愁である」と述べている。ここに掲げた《ブランコ》(No.26)を手にしたのは二十数年前のことだ。

星襄一は四二歳を過ぎて武蔵野美術学校(現・武蔵野美術大学)を卒業している。この武蔵野美術学校で星襄一と同期で、私の同郷に谷口善晴氏という方がおりまして私の友人でもあり、これは彼から譲り受けた作品です。この時に星襄一からの書簡を一〇〇通程見せていただいたが、彼は四年ほど前に亡くなり、この貴重な書簡は現在不明であり大変残念に思っている。

余談になるが、一九七二年にヘンリー・キッシンジャー大統領補佐官が帰国の際、自分で選んだ星襄一の版画作品三点を本国に持ち帰ったという。また、田中元首相はハワイ会談の際、ニクソン大統領に手土産として星襄一作品《白い林》を贈ったという。棟方志功、浜口陽三、星襄一、池田満寿夫と、版画も国際的に漸く認知されたのだろう。

金井徳重(長野県中野市)

## 星 襄一 《ブランコ星座26番》

版画・紙 58.0×43.0cm 1966年

Hoshi Joichi The Branko Constellation 26th



## 星 襄一 (ほし・じょういち / 1913 - 1979年)

新潟県生れ。1932年台南師範学校卒。版画を独習。52年日本版画協会会員。56年武蔵野美術学校西洋画科卒。59、61、63年国際版画ビエンナーレ出品。67年サンパウロ国際版画ビエンナーレ出品。60 - 76年国画会会員。千葉で没。65歳。

# 加藤 正 《虹から生まれた卵》

自らりんごの木を植える人であれ

この作品は二〇一四年の作品である。加藤氏はこの時期、コロリとした愛らしい卵の作品の制作過程を携帯メールで送って下さった。「卵に夢中なのですか？」と伺えば「生と死が混在しているところに魅力を感じている」とのお返事が。光と影のような二次元の物の捉え方を神秘的な感覚だなあと感じたものである。

デモクラート美術家協会の双壁とも言える瑛九は晩年点描の作品を多く残した。この卵の作品は晩年の瑛九カラーと呼応しているような色彩であることが興味深い。今にも泣きだしそうな曇天に似たダークな色の中央に卵が配されており、中央にはパステルカラーの愛らしい色彩が生命の息吹を感じさせる配置で点在している。「子供は卵で産みたい」と発言しメディアを沸かせた女優さんがいたけれど、母体を思わせるようでもある。

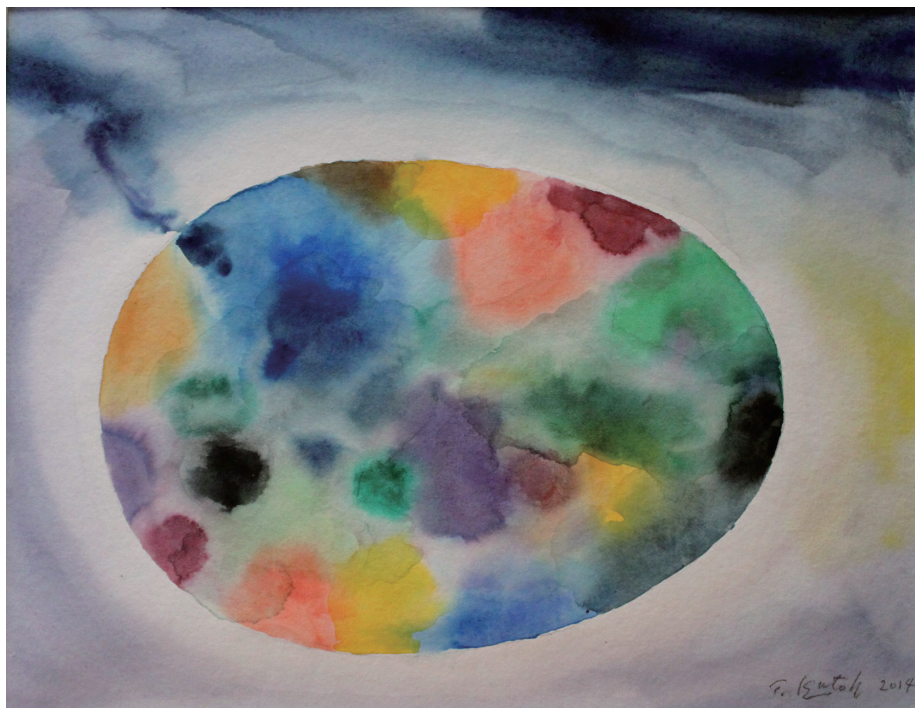
加藤氏は「自らがりんごの木を植える人であれ」と後輩に言葉をかけていらした。現代においてもひとつも古さを感じない瑞々しい精神を加藤氏は生涯持ち続けていらした。父のようであり兄弟のようであり仲間として接して下さった。この作品の前に立つと、「自らがりんごの木を植える人であれ」と原点回帰の気持ち芽生える。生まれなさい、卵のままではいけないよ、と氏の声が聞こえるようである。

上村真澄（宮崎県児湯郡川南町）

加藤 正 《虹から生まれた卵》

水彩・紙 30.0 × 37.0cm 2014年

Kato Tadashi Egg Generating from a Rainbow



加藤 正（かとう・ただし／1926 - 2016年）

宮崎県生れ。1950年東京藝術大学油絵科卒。52年瑛九等とデモクラート美術家協会設立。機関誌『DEMOKRATO』を編集発行。73、74年渡仏。2001年宮崎で「フラクタス」を結成。東京で没、90歳。

# 瑛九 《愛情》

## 愛情はエナジーである

瑛九の発言は際立った言葉が数多く残されている。例えば、「我々はまずデモクライトとして出発する。我々は自由に希望をもって制作し大衆とともに熱意をもって語るであろう」等。その言葉はとても熱い。

日本の画壇へ一石を投ずる形となったデモクライト美術家協会を発足する立役者の言葉である。作品はまるで万華鏡のようにありとあらゆる色彩と技法を用い生涯を制作に捧げた瑛九。

典型的な油彩を描いたと思えば、エッチング、リトグラフ、ペン画、コラージュ、フォトデッサン、点描。存在しないものは新しい技法を生み出してでも存在させる。なんと変化自在なことだろう。

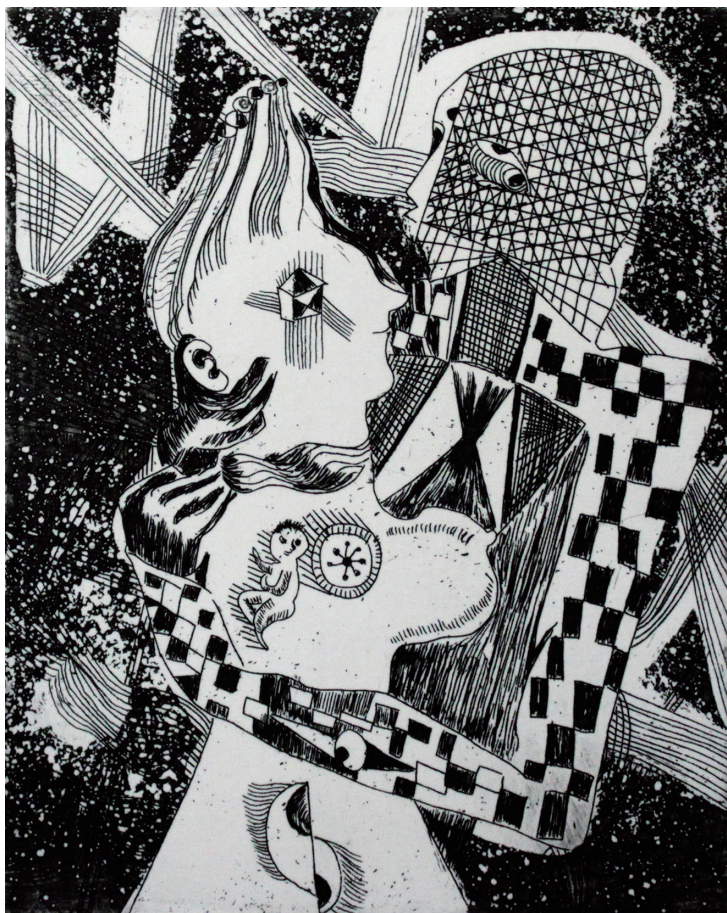
私感であるがその熱さの所以をこの作品タイトルから紐解いてみようと思った。

瑛九は愛妻家だったそうだ。幼い頃に母が病死した瑛九。「私も母親になる気持ちで、ずーっといましたから、本当に母親のような気持ちでした」。都夫人の言葉である。(生誕一〇〇年記念瑛九展図録より)

お二人の思いを綴ったノートがある。「あなたを愛するために僕はずいぶんかわったのです」とある。都夫人に捧げた言葉だ。猛々しい瑛九のもうひとつの表情である。

世界に打って出ようとする時のエナジー。岡本太郎には敏子が、与謝野晶子には鉄幹がいた。私は瑛九の作品に支えられ、人生にエナジーを頂いた。それはお二人の愛情に支えられた賜物だったのだと作品を握る手に力が入る。

上村真澄 (宮崎県児湯郡川南町)



瑛九 《愛情》

エッチング・紙 30.0 × 23.0cm 1952年

Ei-Q Love

瑛九 (えいきゅう / 1911 - 1960年)

宮崎市生れ。日本美術学校中退。洋画家、版画家、写真家。前衛的、抽象的な作品で知られる。フォトデッサンを制作。1937年自由美術家協会創立会員。デモクライト美術家協会を結成。創造美育協会に参加。東京で没、48歳。

# 愛嘔 《ハート》

## ハート・ビート・シンフォニー

自宅の書庫に四冊のバイブルに値する本を保管している。タイトルはとてもシンプルで『わたくし美術館』とあり、全国のわたくし美術館を紹介する内容だ。某局のプロフェッショナルさながら各館各様の奮闘ぶりがエッセイとして盛り込まれ読み物としても面白い。

その第一巻の表紙を飾る作品が愛嘔の《ハート》である。表紙を見た瞬間から印象に残っていたのだが時を経てオークションに出品されているのを偶然見かけ、運命的な出会いのインスピレーション買いとなる。ランプならば本と作品でワンペアだ。

さて、作品を旅することしよう。二つのハートが前後に重なり同じ鼓動を打つようであり輪唱的にも見える。コレクターのまなざしで見れば前方は作家さん、後方はコレクターと言えようか。それは夫婦・親子・友人・仕事仲間・国と国、呼応し合える全てに例えられるであろう。支え合い、高め合い、二つが一つになって美しい虹色のシンフォニーを奏でられたなら、次は三つ目のまだ描かれていない観客の心を虹色に染めることが出来るのではないだろうか。そんな気持ち「わたくし美術館」を創設しようとなさる先人の情熱の源泉であったのではなからうか。袖触れ合う仲間とワルツを踊るような時間を過ごしたいものである。ハートをドキドキさせながら作品とともに。

上村真澄（宮崎県児湯郡川南町）

## 愛嘔 《ハート》

シルクスクリーン・紙 90.0 × 90.0cm 1976年

Ay-O Hearts



## 愛嘔（あいおー／1931ー）

茨城県生れ。1952年デモクラート美術家協会に参加。54年東京教育大学芸術科を卒業。58年渡米。62年フルクサスに参加。69年ジャパン・アート・フェスティバルで大賞を受賞。2016年茨城県玉造に愛嘔美術館が開館。

# 菅野 功 《静物》

## 真摯なものへの憧れ

青年時代にその絵に感銘し、生き方にまで影響を受けた画家のひとり菅野功である。卒業を翌年に控えた年の暮れ、銀座の画廊で見た個展でその絵の虜になった。何がそれほど私を夢中にさせたのだろうか。モチーフは北の風景と静物、絵に漂う凜とした緊張感が心地よかった。学生の身で分不相応ではあったが、親に借金してこの絵を手に入れた。その後も個展の案内状が届くたび、精力的に創作に励んでいる様子が頼もしく思われた。社会の荒波にもまれて疲れ、帰っていくのはいつも菅野功の絵の世界だった。そこには気持ち落ち着かせ、明日への活力を呼び覚ましてくれる何かがあった。画家は厳寒の荒れた北の海をたびたび描いた。あの年の展覧会で次のような一文を寄せている。「どうしてこんな苦勞までして毎冬北の海に出かけるのか。穏やかな美しい季節に、美しい風景を描けばと思うときがある。然し私はこんな荒れた海の情景が心の中では描きたい」(美術ジャーナル画廊個展)

風景、静物を問わず画家が対象を借りて表現したいと思ったものは何だったのか。作品からは、しっかり目を見据えて人生を真剣に生きようとするひたむきさが伝わってくる。絵に込められた画家の思いが青年の日の私を捉え、自分もそんなふうに生きてみたいという真摯なものへの憧れが、その時私の心に芽生えたのかもしれない。

棚橋 章 (千葉県松戸市)

### 菅野 功 《静物》

油彩・キャンバス 41.0×53.0cm 1982年

Kanno Isao Still Life



菅野 功 (かんの・いさお / 1927 - 2006年)

川崎市生れ。松村画廊、横浜せんたあ画廊で個展を開催。1980年TVKテレビで作品が紹介される。86年横浜市主催の横浜美術招待展に出品。横浜美術協会会員、川崎市美術展審査員。2006年没、79歳。

# タカハシ・ノブオ《人形》

## 叫ぶ原色 物語る黒

人形を描く画家は多い。私は単に鑑賞用の人形をただ綺麗に、可愛く描いた絵は好まないし、決して「美」とは思っていない。忠実に描かれた絵ほどつまらないものはない。人形は信仰や呪いの対象として生まれてきた。人形の持つ本質が描かれてこそ、真の「美」がある。人形は愛と憎しみ両方の対象となってきた。だからこそ、人形には精霊の存在が信じられてきたし、私もそれを感じる。この絵を最初に見たとき、なんだか、「女」の深奥に秘められた「情念」を感じて、即座に購入した。人形を描くのは人物画より難しい。それは「ひとがた」は人を呪う対象であったからであり、人形の持つ「霊」を描かなければならないからである。この絵に作家の「女」に対する「愛」「憎しみ」ひいては「呪い」まで感じるのは私だけであるうか。なお、この作家の持つ色彩感覚、描写力は天賦のものであり、誰にも真似ることはできない。作家を支えてきた画廊主の言葉「叫ぶ原色、ものがたる黒」でそのすべてが表現されている。作家は「異端」「反骨」「無頼」「孤独」「酔いどれ」「新開地」のゴッホ等と呼称されているが、そんなことは私には関係ない。作品の発する力だけで充分である。現在まで生きてきて、タカハシ・ノブオ作品に出会えた幸せをしみじみ感じさせてくれる私の愛する作品である。

三浦 徹（兵庫県神戸市）

タカハシ・ノブオ《人形》

油彩・ボールカンバス 41.0×31.8cm 1973年

Takahashi Nobuo A Doll



タカハシ・ノブオ（たかはし・のぶお／1914－1994年）

徳島県生れ。船員として働きながら、洋画家・今井朝路に師事。二度従軍。神戸港で沖仲仕を務める。独特の画風を確立。エーゲ画廊で個展を開催。1970年NHKテレビ「港湾の画家」に出演。94年没、80歳。

# 松村光秀 《黙唄》

「失ったから知った存在感」

「火事で妻子を失ってから松村の絵は大きく変わった。眼前にいない人間を描くようになって、当たり前の人体像では満足できなくなったのである。極端に細長いデフォルメをしていても、顔、胸、足などの部分部分の表情は適確で、全体に統一感がある。画家の情念の世界の中で、人間が芯で捉えられている気がする」

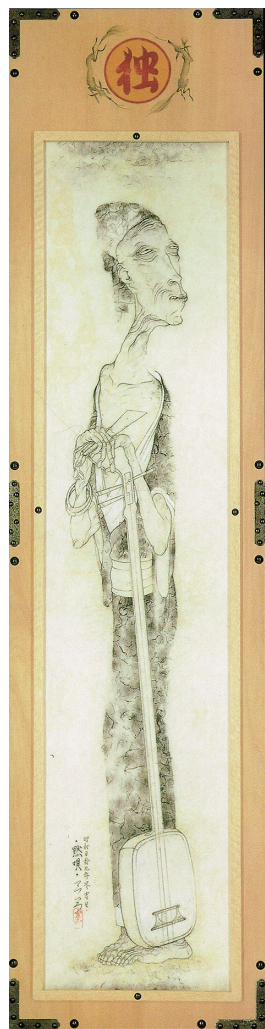
（『芸術新潮』一九八五年三月号に掲載された下村良之介氏の文章より抜粋）

三浦 徹（兵庫県神戸市）

松村光秀 《黙唄》

コンテ・和紙 152.0 × 33.0cm 1984年

Matsumura Koushu A Silent Song



松村光秀（まつむら・こうしゅう／1937 - 2012年）

京都市生れ。1952年京都の看板屋「竹松画房」で働く。絵は独学。京展、二科展に入選。京都祇園の都雅画廊で個展を開催。木彫も創る。2012年没、74歳。



# 西村宣造 《阿咩》

## 鉛筆画に託した「女」への想い

西村宣造は版画家（エッチング）である。私は椅子に縄で緊縛され、なんとも虚無的な表情をして、サイコロを振っているアルルカンを描いた、西洋的な息吹が感じられる緊張感の強いエッチングを所蔵している。西村は色々な「女」を描く。それは作家自身が「女」をこよなく愛しているからであろう。ただ、そのモチーフは「女」を縄で緊縛したものがほとんどで、西村の「女」に対する特別な想いがうかがわれる。私もおそらく同様な想いをいだいているので、その気持ちは良く理解できる。ただ、この作品《阿咩》は珍しく「女」は緊縛されていない。「女」を愛するあまり、自らがウツボになり、「女」を守護したいとの作者の思いを描出しており、緊縛の時代とは異なった意識を感じる。バックの空間を鉛筆で塗りつぶす作業は、まさしく格闘技と言ってよい程の力量を感じる。なお、この作品は日本的なもの、屏風にしたりしているため、折り曲がった画面からは異次元の世界が表出されている。また、バックも日本画の金箔のイメージと重なっており、鉛筆独特の鉛のもつ毒っぽさが有り、幽かに思える升目の境界線が平面を意識させると同時に、深い闇の空間を感じさせる。描かれた「女」は人間であるのか、人形であるのか、いずれにしても大変美しい。おもわず、私もウツボになって、この世界に入り込みたい感をもたせる私の愛する一点である。

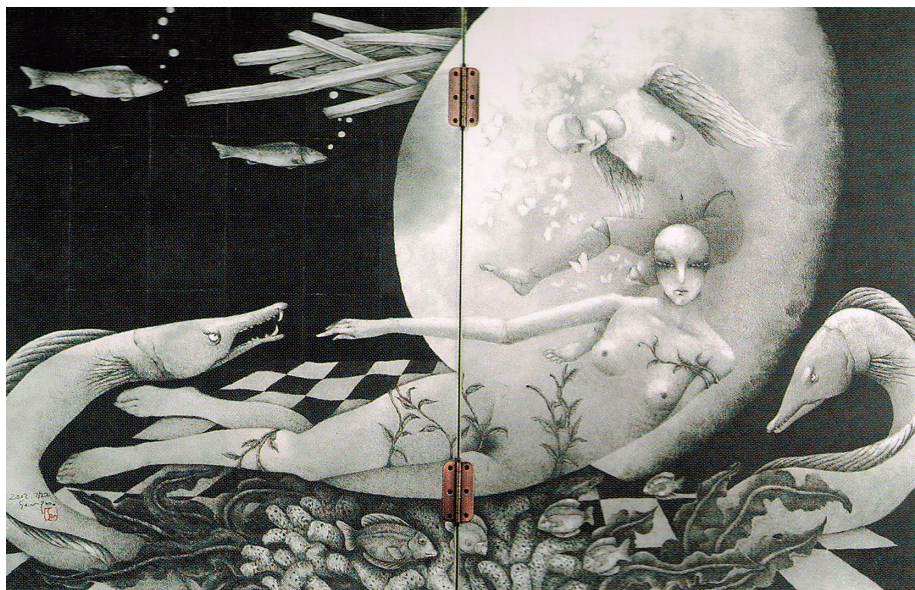
最後に作家が作品に沿えたコメントを追記する。「ボクにとって『女』とは、生と死の間を静かに観、奏でる観音様、母のように甘えていたい。女に甘えていたい。阿咩のように『女』を守れたら、どんなにいいかと思いつつ、いつも甘えるばかり」

三浦 徹（兵庫県神戸市）

## 西村宣造 《阿咩》

鉛筆・紙 67.0 × 102.0cm 2002年

Nishimura Senzo A-un



西村宣造（にしむら・せんぞう／1943 - 2012年）

大阪生れ。1974 - 78年パリに游学。  
個展を中心に発表。2012年没、69歳。

# 松田正平 《自画像》

## 自画像の在り方を問う姿勢

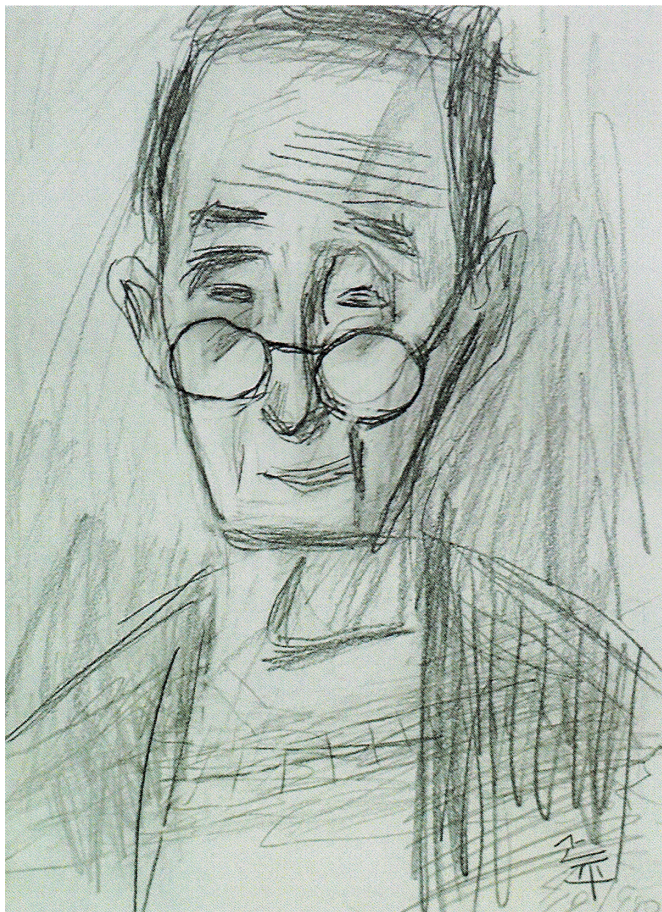
鉛筆による自画像である。飄々とした生き様が見事に描き出されている。もし、他の画家が松田の像を描いたとしても当然のことではあるが、この作品に勝る画は描けないはずだ。よくここまで自分自身のあり様を、消化して作品に仕上げられたものである。私は松田のポर्टレートも持っているが、それと比較しても写真との相違は明らかで、これこそが自画像を見る醍醐味であることを思い知らされた作品であり、私の愛する一点である。尚、今回、出品したこの作品は、わの会の会誌第四三号、テーマ「自画像」に掲載したものである。

三浦 徹（兵庫県神戸市）

松田正平 《自画像》

鉛筆・紙 33.0 × 25.0cm 1998年

Matsuda Shohei *Self-Portrait*



松田正平（まつだ・しょうへい／1913 - 2004年）

島根県生れ。1937年東京美術学校西洋画科卒。37 - 39年渡欧。42年国画奨学賞を受賞。51年国画会会員。フォルム画廊、現代画廊、菊川画廊等で個展を開催。87年山口県立美術館で回顧展。宇部市で没、91歳。

# 小石サダヲ 《鎮魂》

## 〈透徹した空間〉

小石さんとは、二五年位前、六本木のウイーン派アーティストスクールで、イーゼルを並べて描いていた仲間である。

寡黙な彼が、超細密な技法で、不思議な形態の動植物、貝殻、魚類などを、次々と、紡ぎだし、画面に描いてゆくのを目撃した私は、「本物の画家の存在」を驚きと共に感じたものだった。

その後、日本のシュールリアリズムの本拠地ともいえる「青木画廊」等で、個展やグループ展の形で精力的に発表し、ますます画格を高めていった。

しかし、なにかと厳しい人生の試練の中、空手の名手でもある彼は、二〇一〇年に肺ガンの為亡くなられた。

私は、小石さんの作品は大、中、小合わせると八点位コレクションしている。

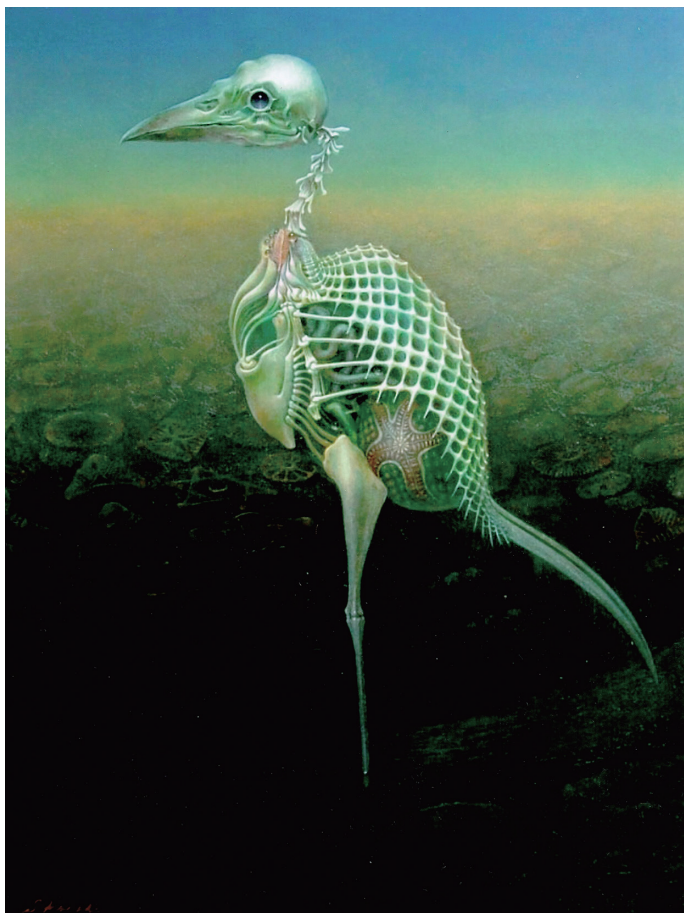
この絵を、我家のプチギャラリーに飾り、日々見ていると、色々な発見があり、彼の素晴らしい人柄も相俟って見飽きない作品である。

伊とうはるこ（千葉県柏市）

小石サダヲ 《鎮魂》

油彩、テンペラ混合技法・ボード 45.5 × 37.9cm 1994年

Koishi Sadao *Requiem*



小石サダヲ（こいし・さだを／1952 - 2010年）

下関生れ。1989年ウイーン派アートスクールで川口起美雄に師事。90年ドイツ・ローランツホーフ画廊、2002年アートスペース美蕾樹で個展。05、08、09年青木画廊で個展。10年没、58歳。

# 松村光秀 《蝶とほうづき》

## 現代の絵師と呼ばれた作家の想い

松村光秀さんの絵にはじめて出会った時、「この世のものではない世界」という印象を受けた。人物の顔、動物の表情など、今まで見たことのない、一度見たら忘れられない雰囲気の話だ。何度かじっくり見ているうちにその表現力、発想、技術がすごいだけでなく、絵に込められたやさしさ、哀しみ、ユーモアが感じられ、惹かれるようになった。

一見、日本画のように見えるが、キャンバスや板に油彩で描かれ、額も絵に合わせて自分で作る。

九歳で母を亡くし、中学を出て看板屋で働きながら二七歳で初個展を開催し、画家の道へ。

四二歳の時、火事により一瞬にして最愛の妻と三人の子ども、住居、絵画作品を失うという想像を絶する残酷で悲惨な体験の後、哀しみのなか、亡くなった夫人と子供たちを描いた《なわ・とんで》を発表。

その後も悲劇を自分の中に取り込んで、自身の想いを、鎮魂の作品、自画像、彫刻などに表現し続けた。

この絵は松村氏の作品のなかでは、穏やかな作品で、女性は立ち姿も顔や手の表情もとても優しい。亡くなった夫人と、蝶になった作者が交信しているのだと思った。

松村氏は、今、天上界で最愛の妻と三人の子どもたちと穏やかに過ごしているのだろうか。

荒井よし枝（東京都中央区）

松村光秀 《蝶とほうづき》

油彩・キャンバス 115.0 × 37.0cm 2008年

Matsumura Koushu *Butterfly and Ground Cherries*



松村光秀（まつむら・こうしゅう／1937 - 2012年）

京都市生れ。1952年京都の看板屋「竹松画房」で働く。絵は独学。京展、二科展に入選。京都祇園の都雅画廊で個展を開催。木彫も創る。2012年没、74歳。